

学位論文の要旨 (論文の内容の要旨)
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

論 文 題 目
Dissertation title

「女らしさ」が生成する場：フィリピン、マニラ首都圏の日本人向けカラオケパブの労働誌

広島大学大学院国際協力研究科
Graduate School for International Development and Cooperation,
Hiroshima University
博士課程後期 教育文化専攻
Doctoral Program Division of Educational Development and
Cultural and Regional Studies
学生番号 D160224
Student ID No.
氏 名 田川 夢乃
Name Seal

本論の目的は、商業的性取引の労働現場における「女らしさ」を行うという生成的な過程を詳細に考察することで、性的物象化をめぐる規範的・倫理的議論が見過ぎてきた「女らしさ」の偶発的で遂行的な出来事（状況）としての側面を明らかにすることである。そのため、本論は、フィリピン、マニラ首都圏の日本人男性向けカラオケパブ（JKTV）の事例をとおして、「女らしく」振る舞うことを前提とする労働現場の実態を詳細に検討した。その結果、日常の何気ない行為をとおして身体に表出する「女らしさ」は、複数の権力が交差する結節点としての身体とともに可変的に生成し続けているということが明らかになった。

J. バトラーのジェンダー・パフォーマティヴィティの議論は、歴史的に構築された権力作用の上で行為が模倣・反復されることによってジェンダーが構築されるという点を焦点化した。これに対して本論は、複数の権力作用が個々の女性によってどのように経験されるかという点を焦点化するポストコロニアル・フェミニズムの議論を接続した。そうすることで、本論は、ジェンダー・パフォーマティヴィティの議論だけでは十分に捉えることのできなかつた、ミクロな状況における権力作用の錯綜を前提とした生成的なジェンダーのありようを具体的な事例に則して明らかにするとともに、歴史的な権力構造の反復とは異なる可能性を提示しようと試みた。

本論の議論は、JKTVという労働現場におけるフィリピン人女性接客者（CCA: Customer Care Assistant）たちの日常的な実践に、著者自身が参与し観察するなかで生じた問題意識に基づいている。CCAたちは、美しく着飾り、綺麗に化粧を施し、時にいやらしく振る舞うことで日本人男性客を歓待し、収入を得ていた。他方、急進派フェミニズムに代表される性的物象化の議論では、女性が男性好みの「女らしい装い」をすることは、男性優位の社会構造への従属とみなされ、そうした構造を強化し、再生産するものとして批判されてきた。また近年では、そうした態度はポスト・フェミニズムとして、個人の成功のために男性優位の社会論理に従う女性として批判される。確かに、こうした批判は、女性の権利や平等の獲得を目指す運動において、男性と女性との非対称な権力関係に基づく女性への抑圧や暴力に抵抗するための大きな力となる。だが、これらの批判的見方に従って、CCAをはじめとするナイトワーカーたちを女性の連帯から排除したり、更生が必要な救済の対象としたりすることは、彼女たちの生きられた経験を取りこぼしてしまうことにつながるのではないだろうか。

そうしたこれまでの議論に対する疑問から、本論は日々「女らしさ」を生きる女性たちの身体実践を説明するための新たな理論的・方法論的枠組みを構築する必要があると考えた。そして、CCAが自らの「女らしさ」を演出し、また、男性客が彼女たちの「女らしさ」に誘惑されるという、実践的な側面に注目した。ここで「女らしさ (femininity)」とは、「〔異性愛を前提とする〕 帰属社会の規範や慣習に則して女性に適した、あるいは典型的であると考えられる特徴」という辞書的な意味を踏まえている。その上で、女性接客者による男性客向けナイトワークのサービス＝商品の根幹をなし、顧客を惹きつける最も重要な魅力の一つとして「女らしさ」を労働の文脈から捉えている。加えて、労働の過程において、「女らしさ」が、女性たち個人の行為というよりも、彼女たちと顧客との相互行為において間身体的に立ち現れる生成的側面に主眼を置く。意図的／非意図的、能動的／受動的といった行為のグラデーションのなかで生じる間身体的な「女らしさ」の身体実践を、パフォーマンスに生成変容する動的性格から検討することで、流動的で多義的な性的身体のアクチュアリティを掴むことを試みた。

フィリピンのJKTVで行われる「女らしさ」のパフォーマンスは、第二次世界大戦以降の外国人向けエンターテインメント産業の勃興とともに構築されてきたといえる。在比米軍向けの「休息と娯楽産業」が整備されたことで、フィリピンはタイと並んで東南アジアにおける一大セックス観光地のひとつとされるようになった。そのようなフィリピンの赤線地帯が深く関係するようになったことには、マルコス政権期における観光開発と出稼ぎ労働推進政策に主な要因がある。1980年代以降の日本の高度経済成長にともなう「買春ツアー」ブームと、1990年代以降の「ジャパゆきさん」と呼ばれる日本への興業ビザでの出稼ぎ女性労働者の爆発的増加が起点となることで、フィリピンへの買春観光における「エキゾチック」で「オリエンタル」な異国のフィリピン人女性のイメージと、日本社会における「ジャパゆきさん」としてのフィリピン人女性のイメージが、現在に至るまでの日本人男性客とCCAの関係性に大きな影響を与えてきた。

そのようなイメージはJKTVにおける「フィリピン人女性CCA」のパフォーマンスを構築するために利用されてきた。JKTVの経営者はそうしたイメージを利用して店内空間という舞台装置をつくりあげ、顧客が期待するイメージ上の「フィリピン女性」に適するパフォーマンスを行うために、CCAを規律訓練する。JKTVという商業的性取引の空間では、「女らしさ」や「ふしだらさ」がサービスに付加価値を与えるものとして強調され、意図的に演じられ、表現されている。CCAは罰金を課されることで店のルールに従うようになり、ポイント制の加算方式の給料によって顧客獲得競争に駆り立てられ、顧客が期待する「女らしさ」や「ふしだらさ」を演じるようになる。他方、実際の接客場面では、規律権力が直接介入するような教授的な学習ではなく、先輩CCAや人気のあるCCAの模倣学習によってパフォーマンスが形成されていた。

同時に、CCAの「女らしさ」のパフォーマンスは、そのような意識的で意図的な行為のみから形成されているのではなかった。むしろ、日常的に彼女たちの「女らしさ」を生成しているのは、接客場面における顧客との相互行為のなかで非意図的かつ偶発的に立ち現れる即興的な状況であった。男女間の性愛的関係が暗黙の前提とされている男性向けナイトワークの現場では、とりわけ、「疑似恋愛」というプレイが接客サービスの基本となる。そのようなサービスでは、自らの感情をコントロールすることで顧客に肯定的な感情を生起させることが求められる。他方、CCAと顧客の親しみを帯びた関係性においては、「疑似恋愛」が行われるなかで偶発的に生起する感情管理を超えた「本当の感情」がCCAと顧客との親密性を醸成するとともに顧客を惹きつける商品的価値が生成していた。

さらに、そうした接客場面においてCCAと顧客の身体が相互行為のなかで非言語的かつ非意

図的に反応・作用しあうことで、偶発的でパフォーマンス的なアクチュアリティが立ち現れていた。このような即興的な状況がCCAの接客サービスへと還元されることで、CCAの身体に対する商品的な価値づけが生成されるのである。

しかしながら、そうした女らしさの相互生成的側面は、CCAに対する暴力的な結果を招く恐れがある。女らしさの身体実践は、単に女性がより良い生を営むための力となり、男性支配の社会構造をうまく乗りこなすための抵抗の源となるわけではない。CCAは顧客によって言語的な齟齬を利用され、時に理不尽に性的搾取されることもある。それは他者とのコミュニケーションの過程にある状況であるからこそ、制御できない不確実な状況なのだといえる。

これらの具体的な事例を用いて検討してきた結果から、終章では、本論を整理したうえで、序論で提示した疑問点に改めて立ち返り、本論の意義と独自性を示した。本論のこれまでの内容からは、日常の何気ない行為をとおして身体に表出する「女らしさ」が、複数の権力が交差する結節点としての身体とともに可変的に生成し続けているということが明らかになった。歴史的に構築された権力作用の上で行為が模倣・反復されることによってジェンダーが構築されるというジェンダー・パフォーマンス性の議論に対して、本論は、ポストコロニアル・フェミニズムの議論を接続した。この視点は、性の客体化が行われる状況で、ポストコロニアルかつネオリベラルな権力関係が個々の女性の身体にいかん表象され具体化されるかということを検討するものである。ポストコロニアル・フェミニズムの議論を援用することで、本論は、ジェンダー・パフォーマンス性の議論だけでは十分に捉えることのできなかつたミクロな状況におけるジェンダーの生成のありよう、つまり、位相の異なる複数の権力が錯綜するなかでジェンダーが生成する状況を明らかにした。その上で、他者から客体化されるとともに自らを客体化する女性の経験が、抑圧的で固定的な男性優位の社会構造とは異なる関係性を再構築する契機となりうることを指摘した。

本論でみてきたように、「女らしさ」は一方向的に押し付けられるものでも、自主的に表現するものでもあるが、それだけでは表しきれない曖昧さと偶発性をもった可変的で生成的な概念である。そしてより重要な点として、「女らしさ」は他者がいなければ成立しない概念であるといえる。何が「女らしさ」であるのかは、それを見とめる他者がいなければ生じえないし、「らしさ」とは何かを参照する歴史性がなければ成立しない。「女らしさ」は一時的で過渡的な状況・状態なのであり、CCAたちが生きるために日々行っている「手段」であるといえる。

以上のように、本論は、「仕事」の文脈のなかでの日常的な実践を描き出すことで、ミクロな状況で生じる「女らしさ」の性的物象化において、位相の異なる複数の権力関係が作用していることを明らかにした。しかしながら、仕事の空間を離れた日常性における規範や権力関係のもとでのジェンダー規範や期待のありようの記述が不十分である。この点は今後の課題として取り組み、さらに重層的な記述を行うことで、より複雑かつ開かれたジェンダーのありようを考察していきたい。

【指導教官：関恒樹 教授】

備考 論文の要旨はA4判用紙を使用し、4,000字以内とする。ただし、英文の場合は1,500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 words.